

多様なアート×アクロバット 新鮮な可能性

20世紀に徐々に衰退していったサーカス。しかし1980年代、生まれ変わるようにカナダのシルク・ドゥ・ソレイユやフランスのヌーボー・シルクと呼ばれる個性的な小集団が出現した。日本でも、同様の兆しがある。

香川で「瀬戸内サーカスファクトリー」を主宰する田中未知子は、フランスの自由で闊達かつたつ、アートの心あふれる現代サーカスの実現を目指してきた。この団体と、KAAT神奈川芸術劇場が劇場の創造活動の核を育てる目的で2021年に立ちあげた「カイハツ」プ

瀬戸内サーカスファクトリー + KAAT



櫻井れな氏撮影

ロジエクトの共催でユニークな会が開かれた。フランスの現代サーカスの技術者2人を招き、知識と経験のある人材を育成する6日間のラボおよび成果報告と実演（8月25日、神奈川芸術劇場大スタジオ）である。

大きな空間に様々な機材が設置され、ロープが張り巡らされ、天井から布が垂れ下がる。サーカスのテントに足を踏み入れた時の小さな興奮がよみがえる。布に足を絡めた逆さ吊りを美しくスリリングに見せるが、数人が絡まってうごめく姿は蜘蛛の巣にかかった虫さながらで面白い。不確定の瞬間を互いに共有してゆく阿吽あうんの呼吸。エアリアル（空中での演技）と技術

スタッフらの連携そのものが、一つのパフォーマンスになっていて魅力的だ。

香川発のこの試みは、日本独自の現代サーカスの文化がいずれ海外へと羽ばたく未来を予感させる。討論も充実していた。来年の上演を予定している芥川龍之介の「蜘蛛の糸」に想を得た新作へ、この成果をつなげていく。ロックやミュージカル、そして美術・演劇・舞踊までも自在に取り込んでアクロバットと抱き合わせる現代サーカスは、ジャンルを超えた新鮮な可能性をいつも孕はらんでいる。そのスタートラインを共有した気分になった。

（石井達朗・舞踊評論家）